

長野県埋蔵文化財センター速報展
「長野県の遺跡発掘 2014」

講演会 遺跡報告会

平成 26 年 7 月 26 日(土)

企画：長野県埋蔵文化財センター
会場：長野県伊那文化会館 小ホール

12:30 受付開始

13:00 開会

主催者あいさつ 長野県伊那文化会館館長 宮澤敏夫

遺跡調査報告会 「信州弥生集落一北・南一」

報告1 「上伊那の弥生集落一辰野町 荒神山おんまわし遺跡一」
辰野町教育委員会文化係長 福島 永

報告2 「善光寺平の弥生集落一長野市 塩崎遺跡群一」
長野県埋蔵文化財センター調査研究員 西 香子

(休憩)

14:00 講演会

「伊那谷の弥生文化の展開」 上郷考古博物館館長 市澤英利

15:30 閉会・展示解説

◆お問い合わせ先◆

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4

TEL026-293-5926 FAX026-293-8157

ホームページ <http://naganomaibun.or.jp/>

上伊那の弥生集落

—辰野町 ^{こうじんやま} 荒神山おんまわし遺跡—

所在地及び交通案内：上伊那郡辰野町大字樋口
国道 153 号線「荒神山入り口」交差点を東へ約
1 km。

JR 飯田線伊那新町駅下車徒歩 20 分。

調査の原因：団体営ほ場整備事業樋口地区。

遺跡の立地：河岸段丘上。

遺跡の特徴：縄文時代早期礫群。弥生時代後
期・平安時代の集落。弥生時代の方形周溝墓。

発見された主な遺構：^{たてあなじゆうきよあと} 竪穴住居跡（縄文時代中期 2、弥生時代後期 10、平安時
代 52）方形周溝墓（弥生時代 13）

発見された主な遺物：縄文早期土器、縄文中期土器、弥生後期土器、平安土器
（土師器・須恵器）鉄製品（鉄釧・鋤先・紡錘車・刀子）

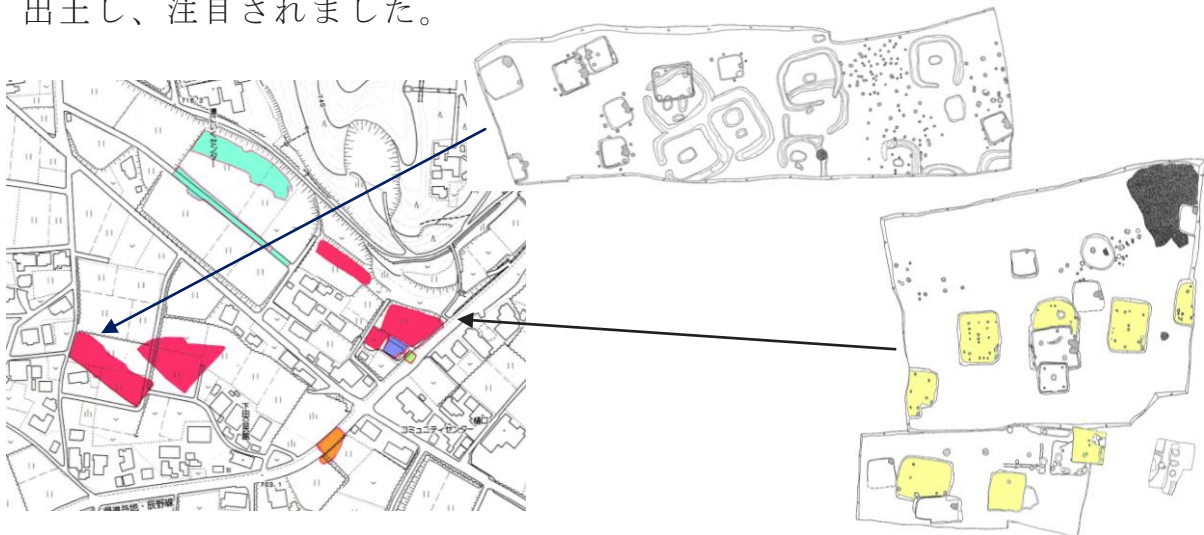


1 遺跡の概要

辰野町は伊那谷の北の入り口に位置し、北部は善知鳥峠^{うとう}を経て松本盆地、
東は有賀峠^{あるが}を越えて諏訪盆地、西は牛首峠^{うしくび}を越えて木曽へと通じています。
また、町内の中央部には、諏訪湖を源とする天竜川が流れ、北部から流入
する横川川と合流し、荒神山付近で大きく蛇行します。

荒神山おんまわし遺跡は、この荒神山の南の麓に形成された河岸段丘上
に展開する遺跡で、約 7.5ha に広がっています。平成元年から 4 年につ
けて、ほ場整備事業や県道の拡幅事業が実施されるのに先立って約 1ha が調
査されました。

この遺跡からは、縄文時代早期から平安時代にかけての遺構・遺物が出
土していますが、弥生時代では、竪穴住居跡のほかに方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}が 13 基
出土し、注目されました。



荒神山おんまわし遺跡の発掘範囲と遺構配置

2 弥生時代の竪穴住居跡

竪穴住居跡は 10 基出土し、このうち、第 26 号住居跡と、第 29 号住居跡、第 30 号住居跡からは炭化材が発見され、火災住居であったことがわかりました。

これらの住居跡からは、形の復元できる土器がまとまって出土し、第 30 号住居跡からは石製の紡錘車、第 26 号住居跡からは石包丁^{いしぼうちょう}が出土しました。ほかにも第 26 号住居跡では、丁寧な作りと、比較的簡素な文様を施す 2 種類の土器がセットで出土しています。



第 26 号竪穴住居跡とそこから出土した土器（弥生時代後期）

3 方形周溝墓

住居跡の発見された段丘の 1 段下では、弥生時代の方形周溝墓^{ひぐちうちじょう}が出土しました。辰野町ではこれまでに、樋口内城遺跡から 2 基出土していますが、今回は 13 基が出土し、この場所が墓域であることがわかりました。

周溝墓は、正方形に溝が巡らされ、1 ヶ所が外部とつながっています。墓は単独で作られているものや、溝を共有するものなどがありました。このうち、第 2 号周溝墓の第 2 主体部からは、破片ではありますが、鉄製の釧（腕輪）がみつかっています。

鉄釧は、いわゆる千曲川水系で広く見つかっていますが、伊那谷では初の出土例となりました。



方形周溝墓群と第 2 号周溝墓から出土した鉄釧

4 周辺の弥生時代の遺跡

遺跡の立地する荒神山周辺は、弥生時代の遺跡が密集する場所として注目されます。中央自動車道建設と、それに関連したほ場整備事業に先立って調査された樋口内城遺跡や樋口五反田遺跡では弥生時代後期の集落が調査され、荒神社矢沢遺跡では、赤く塗られた土器の破片が見つかっています。また、八反田遺跡からも工事中に住居跡と考えられる遺構が出土し、炉に使用されていたと考えられる甕も存在します。

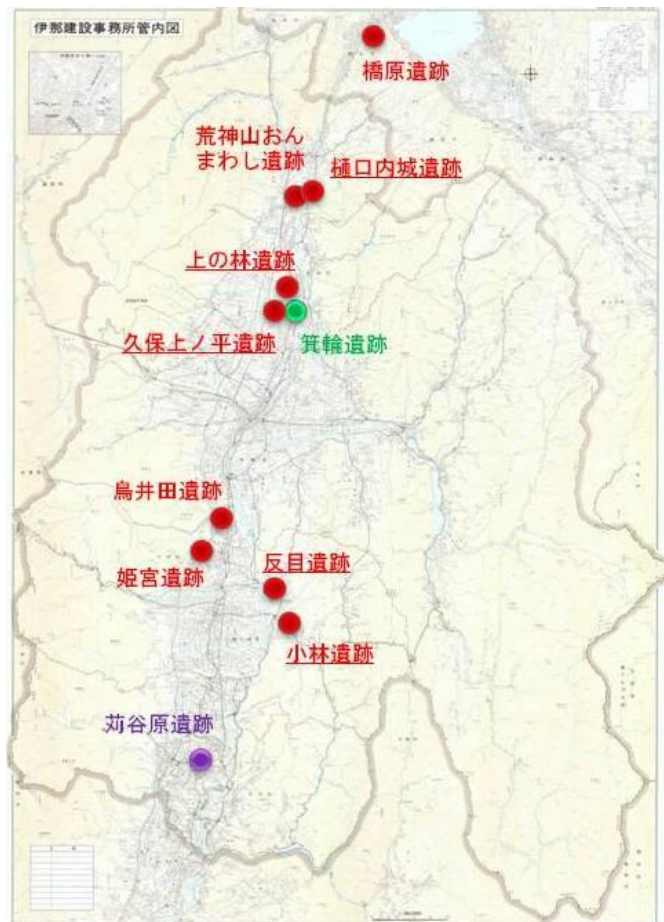
これらの遺跡が集中している要因の一つとして、遺跡周辺に広がる湿地帯を中心とした水田耕作が基盤となっていたことが推測できます。また、1 段高い扇状地上に広がる樋口内城遺跡からは、磨製石鏃が唯一出土し

ており、湿地帯の微高地に存在する樋口五反田遺跡からは鉄斧が発見されています。このように、同じ時代の遺跡ではありますが、遺跡ごとに特徴がみられることから、今後遺跡間の特徴を比較しながら、当時の様子を解明していかなくてはならないと考えています。

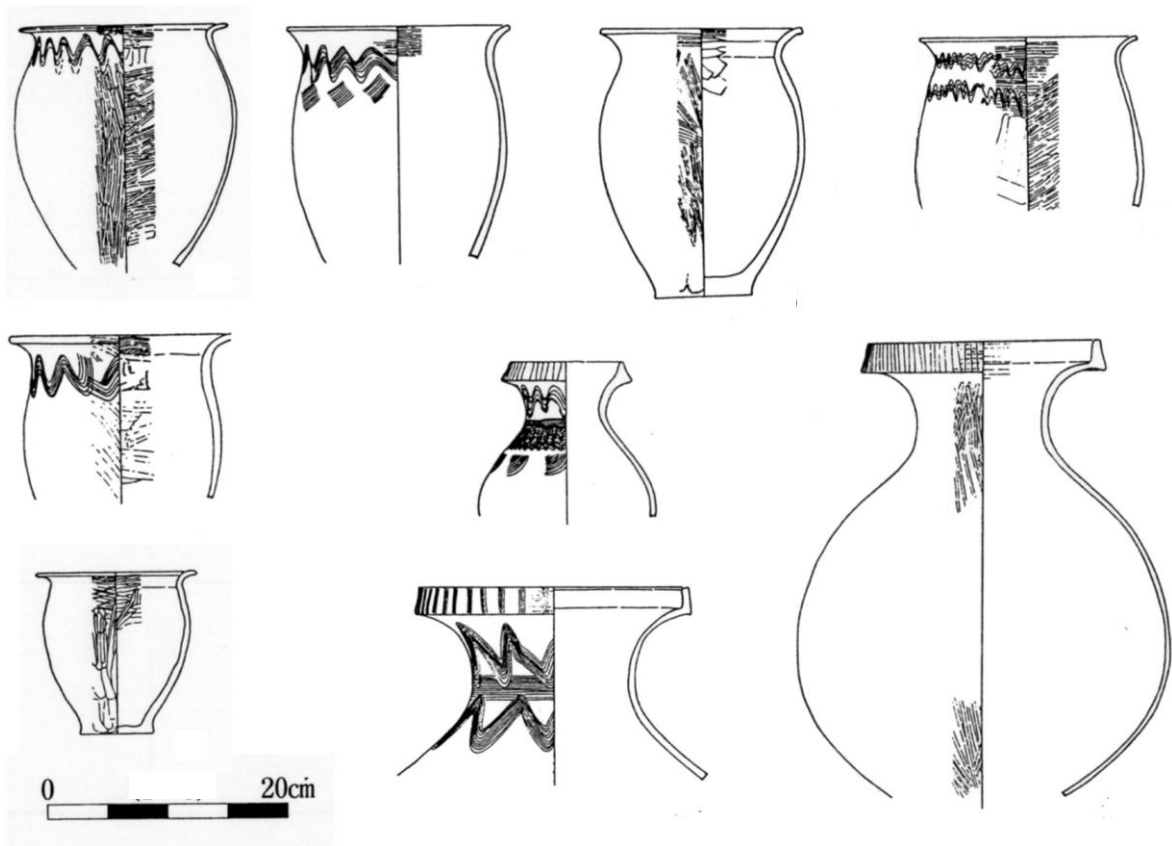
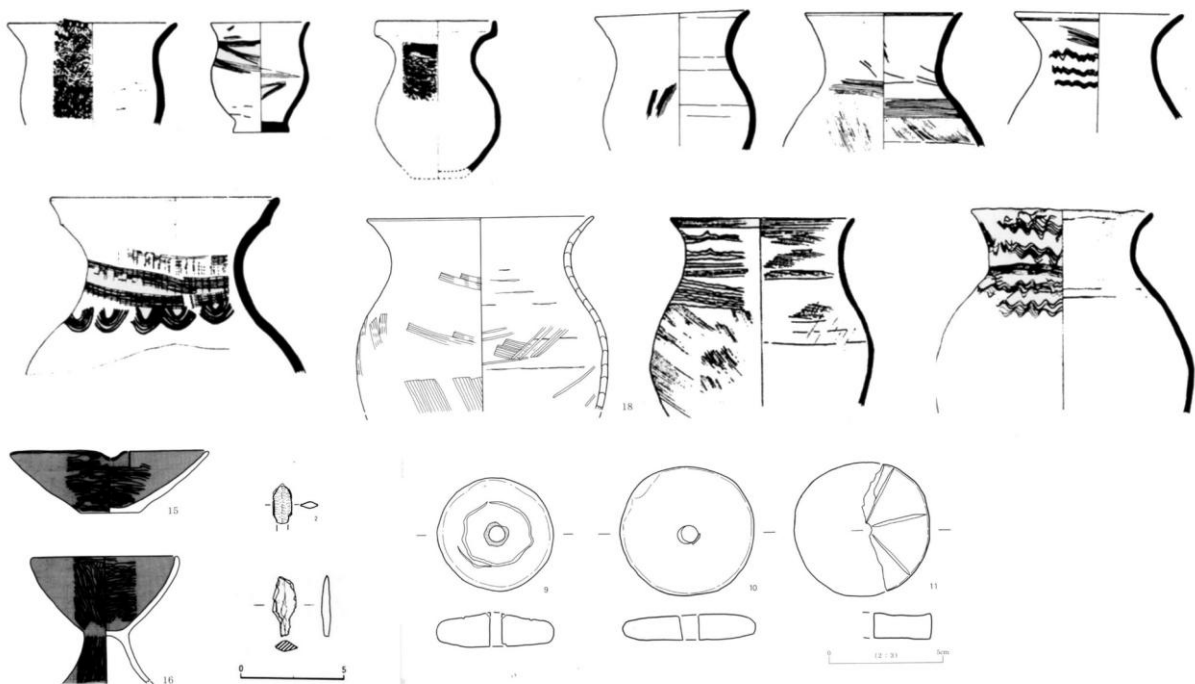
上伊那地方を見渡すと、前期の遺物が出土する中川村の荻谷原遺跡が古く、次いで箕輪遺跡に中期の集落が存在します。

後期になると、遺跡の数が増え、上伊那地方全体に広く分布するようになります。これらの遺跡から出土する遺物を観察すると、伊那市の小黒川周辺を境に、下流は下伊那地方と似た土器が出土しています。天竜川の左岸では、駒ヶ根市まで下っても上伊那地方の文様を持つ土器が出土する傾向があります。

この状況がどのような意味をもつのかは、今後さらに検討していかなくてはならないと考えています。



上伊那地域の主な弥生時代の遺跡



上伊那地域の弥生時代後期の土器（縮尺不同）

（上：上の林遺跡、下：姫宮遺跡）

善光寺平の弥生集落

—長野市 ^{しおざき}塩崎遺跡群—

所在地及び交通案内：長野市篠ノ井塩崎。

JR 稲荷山駅から南東へ約 800m。

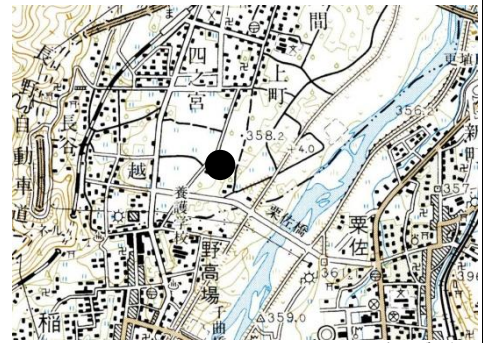
調査の原因：一般国道 18 号坂城更埴バイパス
改築事業。

遺跡の立地：千曲川左岸の自然堤防上に立地。

遺跡の特徴：弥生時代中期～古代の集落遺跡。

発見された主な遺構：弥生時代中期～平安時代
^{たてあなじゆうきよあと}の竪穴住居跡68軒、弥生時代～平安時代の墓跡^{はかあと}26基、奈良・平安時代の掘立柱
^{たてもとのあと}建物跡1棟、弥生時代～中世の溝跡^{みぞあと}21条、弥生時代～平安時代の土坑^{どこう}274基。

発見された主な遺物：縄文時代後期・晩期（土器）、弥生時代中期・後期（土器・石器・玉類など）、古墳時代前期～後期（土器・玉類など）、奈良・平安時代（土師器・須恵器・金属製品など）、中世（陶器・石器など）。



1 遺跡の概要

塩崎遺跡群は、長野市の南端に位置し、千曲川左岸の^{ひじり}聖川から千曲市との境まで南北約 2 km、東西最大幅約 800mの範囲に広がります。遺跡群内には伊勢宮遺跡や松節遺跡など弥生時代を中心とした大規模な遺跡がみつかり、これまでに長野市教育委員会により発掘調査が行われてきました。

バイパスは、南北に延びる千曲川の^{しぜんていぼう}自然堤防上に位置する遺跡群を東西に横断するように計画されていて、平成 25 年度は事業地の東端、千曲川寄りの地区で調査を行いました。

調査では、自然堤防の端部にあたる調査区東側のわずかな部分を除くほぼ全面で、弥生時代から平安時代の竪穴住居跡や墓跡などが重複して確認され、出土した土器などの遺物はコンテナ約 300 箱にのぼります。

平成 26 年度も引き続き発掘調査をおこなっています。



遺跡近景（西側上空より）

2 幾時代にもわたって営まれたムラ

遺跡からは、弥生時代中期（約 2,000 年前）から平安時代（約 1,000 年前）までの竪穴住居跡 68 軒が重なり合って確認され、約 1,000 年間にわたってこの地区にムラが営まれていたことが分かってきました。弥生時代中期にこの場所ではじまったムラは、弥生時代の終わりころになると別の場所に移動し、ここは墓地となったようです。やがて、時代が下り律令社会へと変化していくにつれ、再びムラがこの場所に戻ってくるといった土地利用の変遷が分かりました。

その後、平安時代の後半以降になると竪穴住居跡などは急激に減少し、この場所が現在と同じような畑地などの生産域へとかわっていったと考えられます。



弥生時代中期竪穴住居跡の遺物出土状況



住居跡から出土した弥生時代後期の甕



弥生時代中期竪穴住居跡



弥生時代後期竪穴住居跡

3 さまざまな墓跡

調査では、26 基の墓跡が確認されました。墓の形態は弥生時代の再葬^{さいそう}墓・土壇墓^{どこうぼ}・木棺墓^{もつかんぼ}・方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}、古墳時代の円墳^{えんぶん}、平安時代の土壇墓などさまざまです。墓跡からは土器などの出土が少なく、その多くは詳細な時期がはっきりしません。しかし、みつかった墓のなかには、当時の社会や被葬者の特徴を推察できる重要な遺物が出土した墓跡もあります。

そのひとつは、弥生時代中期初頭の再葬墓^{さいそう}です。再葬墓とは、土葬^{どそう}や火葬^{かそう}

など何らかの方法でいったん葬った遺体を、再び埋葬し直した墓で、縄文時代の伝統を受け継ぐ埋葬方法です。北信地域では、長野市篠ノ井遺跡群や千曲市力石条里遺跡群などで確認されています。今回塩崎でみつかった再葬墓からは、壺が2点つぶれた状態で出土しました。一つは在地でつくられた小型の壺でしたが、もう一つは文様や色などの特徴から、東海地方からもたらされた土器である可能性が考えられます。縄文時代から続く伝統の中に、弥生時代になり新しくコメづくりを伝えた他地域の文化を取り入れていった、当時の文化的特徴が垣間見える貴重な発見となりました。



再葬墓の調査風景



復元された再葬墓から出土した土器

また、古墳時代中期（5世紀後半）の円墳の周溝からは、ウマの歯や骨が出土しました。円墳は、後世の耕作等により墳丘部は削平され、周溝のみの検出となりましたが、直径は約18mと推定されます。出土したウマの歯や下顎骨・四肢骨などは1頭分と思われますが、散在した状態でみつかっていて、その状況からウマは古墳に埋葬された人物の葬送儀礼に供えられた後に周溝内に遺棄されたか、あるいは埋葬された人物に殉葬された可能性が考えられます。県内で同時期のウマの骨の出土が確認されたのは、今まで南信の飯田市周辺に限られていましたが、北信の長野市で確認されたことにより、古墳時代の馬の飼育管理等に携わるような有力者がこの地に存在したことを考察する上で重要な発見となりました。

4 色とりどりの玉類とヒスイの原石の出土

遺跡からは、埋葬の際に死者の遺体に添えられた副葬品と考えられる玉類が50点以上見つかりました。玉類は、ヒスイ製の勾玉、水晶製の算盤玉、緑色凝灰岩・鉄石英・メノウなどいろいろな石材で製作された管玉・青や緑色をしたガラス製の小玉など、さまざまな形や色をしています。また、弥生時代中期の竪穴住居跡の床面からは、ヒスイの原石も見つかりました。みつかった原石は長さ約6cm、重さ約260gで、ヒスイの原石が長野県の遺跡から出土することは珍しく、弥生時代の遺構からみつかったものとし

ては県内最大級となります。製品となったヒスイ製の玉類が出土することはあっても、加工していない原石が原産地（新潟県姫川流域等）以外でみつかることは珍しく、遺跡内で勾玉を製作していた可能性を考える重要な資料となりました。



さまざまな玉類

（上：勾玉、中：管玉、下：算盤玉・ガラス小玉）



ヒスイの勾玉と原石

5 善光寺平の弥生時代の遺跡

善光寺平では、高速道路等の建設に伴いたくさんの弥生時代の遺跡が調査されてきました。前期末～中期初頭の遺跡では、千曲市の^{みねうたいざか}峯謡坂遺跡・力石条里遺跡群、長野市篠ノ井遺跡群で再葬墓などの墓跡がみつかっています。

中期中頃～後半の遺跡では、銅^{どう}戈・銅^{どう}鐸が発見され全国的に注目を集めた中野市柳沢^{やなぎさわ}遺跡、栗林式期の標識遺跡である中野市栗林^{くりばやし}遺跡、磨製石斧の製作関連遺跡である長野市榎田^{えのきだ}遺跡・松原^{まつばら}遺跡など、多数のムラの跡がみつかっています。

後期では、長野市榎田遺跡・松原遺跡・浅川扇状地遺跡群（吉田高校グラウンド^{あさかわせんじょうち}遺跡等）・箱清水^{はこしみず}遺跡・篠ノ井遺跡群など多数のムラの跡が明らかになっています。また、長野市篠ノ井遺跡群などで円形周溝墓などの墓跡が確認されています。このほか、長野市川田条里^{かわだじょうり}遺跡や千曲市更埴条里^{こうしよくじょうり}遺跡で、中期と後期の水田跡が明らかになっています。後期末から古墳時代初めにかけては、長野市川田条里遺跡の単独で存在する方形周溝墓や、長野市北平1号墳などの前方後方（型）墳丘墓が確認されています。

伊那谷の弥生文化の展開 ～ はじめとおわりを探る ～

飯田市上郷考古博物館 市澤 英利

1 弥生文化のはじめ

◎教科書（山川出版社 2014『詳説日本史』）の弥生文化・弥生時代の記述

「紀元前 4 世紀頃には、西日本に水稻農耕を基礎とする**弥生文化**が成立し、やがて東日本にも広がった。こうして日本列島の大部分の地域は、食料採取の段階から食料生産の段階へと入った。この紀元前 4 世紀頃から紀元後 3 世紀の中ごろまでの時期を**弥生時代**と呼んでいる。」

（1）阿島式土器と阿島五反田遺跡

阿島式土器：昭和 13 年に大沢和夫氏が考古学界に提唱。

全国的に周知されている弥生時代中期中頃の土器の型式。

中部高地独自の弥生土器で、弥生文化の定着を示す文化と評価。

天竜川・豊川下流域に分布の中心のある土器群も伴出。

阿島五反田遺跡：阿島式土器が出土した遺跡。下伊那郡喬木村に所在。

天竜川氾濫原を見下ろす段丘上に立地。段丘下には湿地がある。

昭和 35・36 年に学術発掘調査、壺・甕がまとまって出土

平成 22・23 年の発掘でも壺・甕・石製農具・イネ・キビ・アワの圧痕土器片

住居跡は未発見であるが、一帯が生活・生産の場であったことは確実。

（2）阿島式土器期はどんな時期

遺跡立地：低位段丘上に立地（豊丘村林里遺跡、飯田市棚田遺跡・寺所遺跡・井戸下遺跡・月の木遺跡）

生産活動：耕作具は伝統的な石製農具であるが、定型化され、新器種も開発

遺跡立地は水辺指向、水田稲作を主にするようになった時期

（3）阿島式土器期以前の雑穀栽培

縄文時代末または弥生前期と呼ぶ時期：在地系と東海系の土器群が使用された。

在地系土器の付着物：土器表面に小さな圧痕が多量に付着

小さな圧痕はアワ・キビ。イネの圧痕はごくわずか。

耕作具は伝統的な石器群。

出土した遺跡：飯田市矢崎遺跡、石行遺跡、権現堂前遺跡、高森町大宿遺跡、深山田遺跡

遺跡は、低位段丘上、中位段丘上、山麓部に立地

アワ・キビを栽培し、イネの存在も知っていた時期。

食糧生産の段階を弥生時代とする立場から、弥生文化のはじまりは阿島式土器期以前のアワ・キビの栽培段階からで、その後人々は水田稲作への指向を高め、阿島式土器期に水田稲作を主とする段階に至ったと考える。

7 月 15 日から始まった国立歴史民俗博物館の企画展「弥生ってなに?!」

始まりが 500 年さかのぼる弥生時代、新たに描かれる弥生文化。⇒水田稲作を行っていれば弥生文化といえるだろうか。

- ・ 矢崎遺跡の種子圧痕土器、打製石斧、横刃形石器、石鏃が展示された。
- ・ 矢崎遺跡の文化を弥生文化と考える研究者と縄文でも弥生でもないとする研究者
- ・ 論争展示という初の試みの企画展

2 弥生文化のおわり

◎教科書（山川出版社 2014『詳説日本史』）の古墳時代

「古墳が営まれた3世紀中頃から7世紀を**古墳時代**と呼び、これを古墳がもっとも大型化する中期を中心に、前期（3世紀中頃～4世紀後半）、中期（4世紀後半～5世紀末）、後期（6～7世紀）に区分している。」

（1）弥生時代後期の伊那谷の南北

＊伊那市小黒川以北：福島さん発表の世界

以南との比較：土器の型式、打製石製農具使用数少、長方形住居、樋口五反田遺跡の炭化米

＊小黒川以南～飯田市天竜峡

低位段丘・中位段丘・山麓扇状地に遺跡は立地

土器・石器・住居には斉一性がある

天竜川・豊川下流域との交流、奥三河・東濃地方への進出

風土の持つ多様性を活かした

斉一性の強い生活様式を生み出した

⇒ 自立的で安定感が伺える弥生人の暮らし

他地域と交流、他地域への進出。

（2）自立的な暮らしの中に変化

使用された甕をみてる

＊斉一性のある在来系の甕を使用 ⇒ 弥生時代後期、自立的で安定感が伺える時期

↓

＊在来系と外来系の甕を使用 ⇒ 遺跡立地等に変化なし

↓

＊外来系の甕とその影響下で生み出された平底甕を使用 ⇒ 前方後方墳の築造（代田山狐塚古墳）
山麓扇状地の遺跡消える

↓

＊生み出された大小二種類の平底甕を使用した時期 ⇒ 水辺指向の遺跡立地

↓

石製農具使用

＊長胴化してきた大形甕を使用した時期 ⇒ 前方後円墳の築造（兼清塚古墳・溝口の塚古墳他）
石製農具が消える、住居内に竈、須恵器の搬入、馬具と馬墓、鉄製農工具と武具

（2）周辺の状況

＊佐久間平沢遺跡 ⇒ 弥生時代後期の土器群・打製石包丁・方形住居と東海の土器群と住居
天竜川・豊川下流域との交流の拠点的な遺跡

＊神坂峠遺跡 ⇒ 弥生時代後期の土器片：東濃への進出の道

古墳時代前期のS字状口縁台付甕片：木曾川流域から伊那谷への道

＊濃尾平野北部の「伊勢湾地方圏」

⇒ 弥生時代末から古墳時代初頭に、東西日本間の流通に関与するために成立

（3）交流路の変化で弥生時代がおわる

＊弥生時代後期

⇒ 奥三河の毛細血管状の道で天竜川・豊川下流域と交流しながら独自の文化を形成した。

＊弥生時代末から古墳時代初頭

⇒ 濃尾平野北部から木曾川を遡り、神坂峠を越えて伊那谷に至る道が機能し始めた。

天竜川・豊川下流域に通じる毛細血管状の道は廃道化した

伊那谷の弥生時代は、濃尾平野一帯から木曾川を遡り、神坂峠を越える道が動脈状の幹線として機能するようになったことで終わり、古墳時代へと移行した。

伊那谷の弥生文化の展開 ～はじめとおわりを探る～



飯田市上郷考古博物館 市 澤 英 利

伊那谷の弥生文化の展開

～はじめを探る～

◎教科書（山川出版社 2014『詳説日本史』）の弥生文化・弥生時代

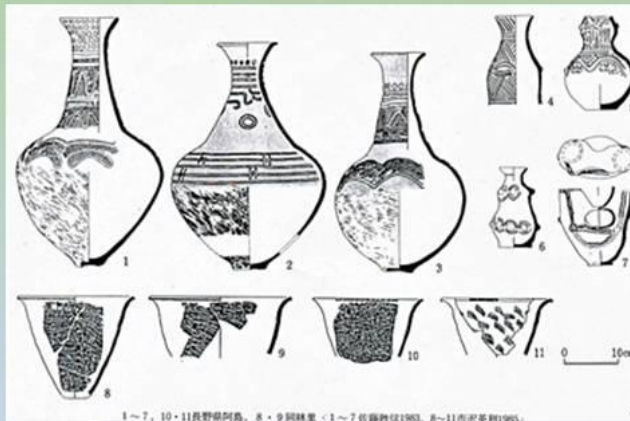
「紀元前4世紀頃には、西日本に水稻農耕を基礎とする弥生文化が成立し、やがて東日本にも広がった。こうして日本列島の大部分の地域は、食料採取の段階から食料生産の段階へと入った。この紀元前4世紀頃から紀元後3世紀の中ごろまでの時期を弥生時代と呼んでいる。」

阿島式土器



昭和13年に大沢和夫氏が考古学界に提唱。

全国的に周知されている弥生時代中期中頃の土器の型式。



中部高地独自の弥生土器で、弥生文化の定着と評価。

天竜川・豊川下流域に分布の中心のある土器群も伴出。

阿島五反田遺跡は天竜川の氾濫原のすぐ上に立地



最近の発掘資料 平成22・23年の発掘調査資料



阿島式土器期はどんな時期

水辺指向の遺跡立地



水田稲作を指向している

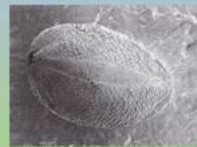
土器圧痕調査でイネ粉痕が複数確認された
(遠藤英子氏調査)



19 弥生時代中期前半から中頃の遺跡分布

飯田市上郷考古博物館 2003『飯丘に住む弥生人の土地利用』より

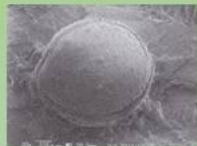
阿島式土器期以前の雑穀栽培



アワ



イネ



キビ

「弥生ってなに？」展示資料



国立歴史民俗博物館 図録

食糧生産の段階を弥生時代とする立場から、弥生文化のはじまりは阿島式土器期以前のアワ・キビの栽培段階からで、その後人々は水田稲作への指向を高め、阿島式土器期に水田稲作を主とする段階に至ったと考える。



8 弥生時代前期の遺跡分布

飯田市上郷考古博物館 2003
『段丘に住む弥生人の土地利用』
より

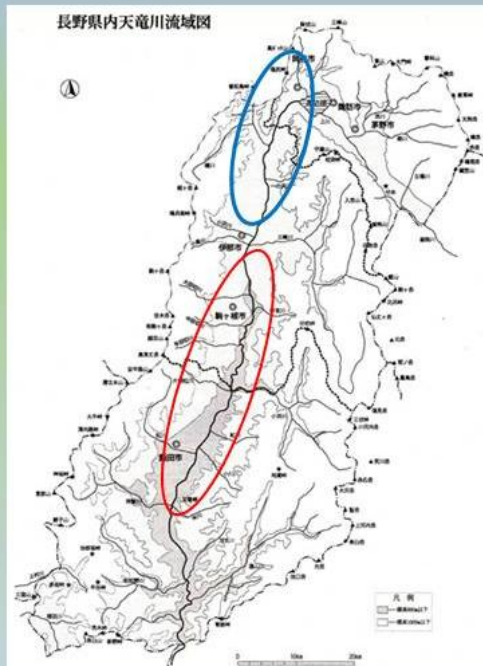
伊那谷の弥生文化の展開

～おわりを探る～

◎教科書（山川出版社 2014『詳説日本史』）の古墳時代

「古墳が営まれた3世紀中頃から7世紀を古墳時代と呼び、これを古墳がもっとも大型化する中期を中心に、前期（3世紀中頃～4世紀後半）、中期（4世紀後半～5世紀末）、後期（6～7世紀）に区分している。」

弥生時代後期の伊那谷の南北



飯田市上郷考古博物館 2003『段丘に住む弥生人の土地利用』より

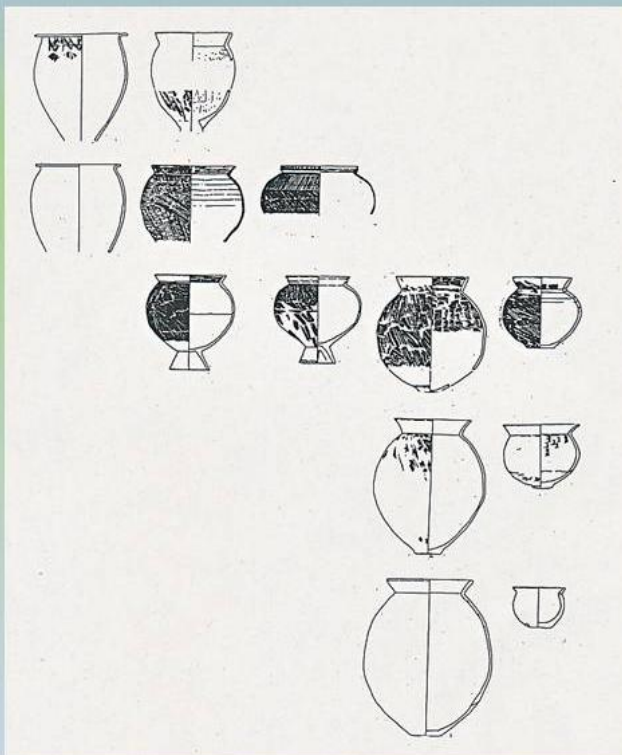


- ・風土の持つ多様性を活かした
- ・斉一性の強い生活様式を生み出した
- ・他地域と交流、他地域への進出。



自立的で安定感が伺える弥生人の暮らし

自立的な暮らしの中に変化



自立的で安定感が伺える弥生人の暮らし

外来系土器の搬入が増える
遺跡の立地に変化なし

前方後方墳の築造(代田山狐塚古墳)
山麓扇状地の遺跡消える

水辺指向の遺跡立地
石製農具使用

前方後円墳の築造(兼清塚古墳・溝口の塚古墳他)
低位・中位段丘上に遺跡立地
石製農具が消える
住居内に竈
須恵器の搬入
馬具と馬の墓
鉄製農工具と武具

周辺の状況



峠付近からの西の風景



峠出土の甕土器片



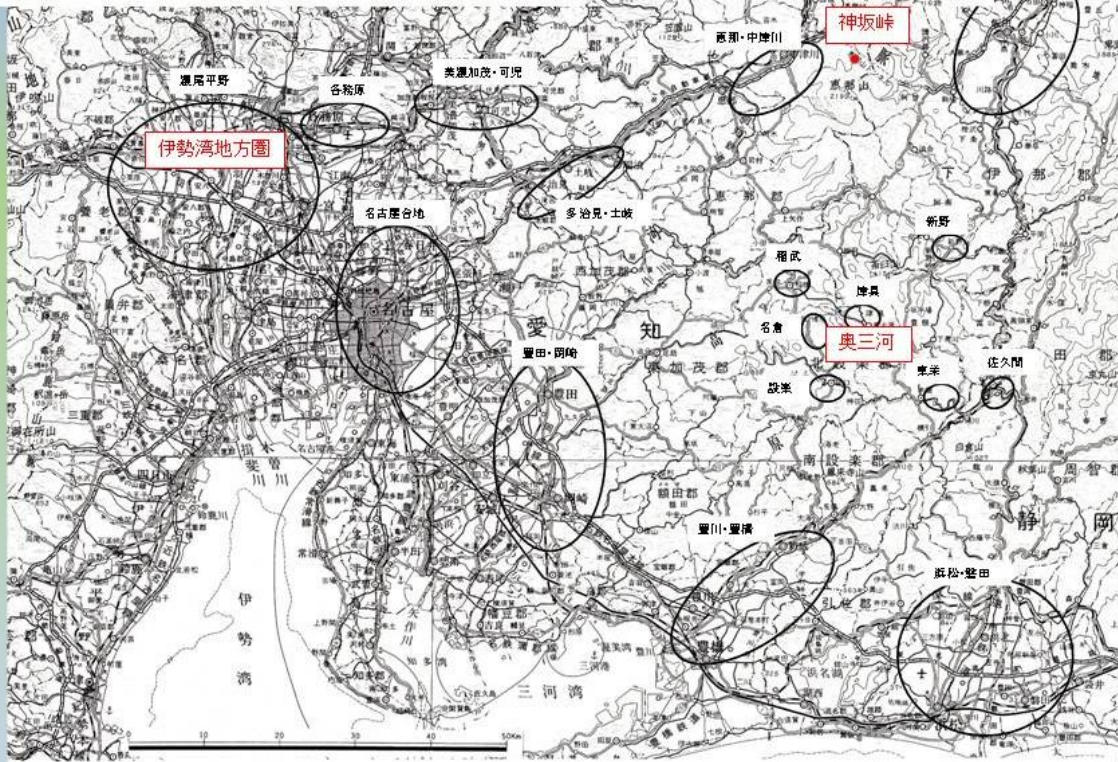
峠付近からの東の風景



峠出土のS字状口縁台付甕片

平沢遺跡

交流路の変化で弥生時代が終わる



伊那谷の弥生時代は、濃尾平野一帯から木曽川を遡り神坂峠を越える道が動脈状の道として機能するようになったことで終わり、古墳時代へと移行した。